

★講演★

永井荷風『狐』を読む

前田 愛

〔昨年十二月六日に行なわれた、児童文化研究誌『舞々』同人主催による講演会より〕

はじめに

きょうは、荷風の『狐』という短い作品をだしに使って、ちょっと、お話しさせていただきたいと思うわけです。

この『狐』は、荷風の少年時代というよりむしろ、幼年時代を扱った作品ですけれども、それを、いわゆる深層心理の側から考える、それから二番目に、この作品を、江戸から明治へという歴史的、文化的なコンテキストにからめて考えてみようと思うわけです。

(一) 「私」から荷風の深層を考える

1 『狐』を書いた頃の荷風

荷風という人は、あまり少年を扱うということはなかった人で、この『狐』という作品と、『すみだ川』という作品がありますけれども、この二つぐらいが、荷風としては、子どもを扱った数少ない作品ではないかと、そんな風に思います。

『狐』という作品が書かれたのは、明治四十一年なんです、

荷風が、アメリカとフランス合わせて、五年程外遊しておりすが——それから帰ってまいりまして、まもなく書いた作品というわけになります。

荷風のお父さんは、内務省の官吏であり、退職してから、実業界に乗り出して、かなり成功した、いわば明治の第一世代である。お父さんは、やはり、荷風を官界ないし実業界で出世せよと考えたのですが、荷風は、そういう父親の意志に背いて、結局は、作家になる。実は、アメリカ、フランスへの留学、これは、お父さんの心積もりでは、その間に、学問をして、日本へ帰ってきてから相当の地位に着いてもらいたいということだったろうと思います。アメリカ、フランスの外遊から帰ってきた荷風は、市ヶ谷の監獄の近くの、大久保余丁町という所——お父さんの家——に、しばらく落ち着くのですが、親友に、こんな葉書を送っているのです。

「家の方は例の如く別に何のこともなく済んだ。帰ってみると、何となく昨夜のことが思い出される。妙に淋しくて今夜も毎夜でも街中をぶらぶら歩いていたいような気がする。親があり兄弟があり成功した知己のある身の上が、なんだか居すらくていやだ。縁側から見る庭の樹木が恐ろしいほど暗くて僕は妙に気が狂っていくようならぬ。」

これは明治四十一年の七月二十六日付の葉書で、その前の晩に、どうも、友達と一緒に、夜遅くまで遊んで帰ってきて、その次の日に、葉書を認めたことでしょう。とにかく、毎晩でも町中

をぶらぶら歩いていた。しかし、一方で父親からの無言の圧力を感じている。明治時代は、外遊して帰った人というのは、責任ある地位に着くということが期待されていた。荷風というのは、そういう世俗的地位というのを獲得するというような、そういう考えは、毛頭ない。そこで、夏の木立ちがいっぱい茂っている庭先を眺めながら、大変憂うつになっていた、というのが、この頃の荷風の心境じゃないか、そんな風に思うわけです。

これと似たような感想は、ほかの小品にも書かれておりまして、この頃書かれたものに、『監獄所の裏』というのがあるので、そこに、こんな言葉が出てきます。

「日本の夜の暗いことは、とても言葉には言い尽くせません。死よりも、墓よりも暗く冷たく、淋しい。いかなる憤怒絶望の刃やいばを持ってするも、つんざきがたく、いかなる怨恨、悪念の焰を持ってするも、破りがたい闇の牆壁とでもいまいましようか……」

こんな風にあります。

荷風にとって、この頃は、アメリカ、フランスの外遊の思い出というものを、かみしめていた時期です。日本に帰ってみると、日本の風土というのは、非常に暗い。特に、荷風の印象に残ったのは、日本の夏の木立ちのうっそうとした茂りだったのではないだろうか。

そういう中で、荷風は、こんなことを考えたのではないか。五年の間、日本という根っこから離れて、外国で、独り暮らしを続け

てきた。そういうところで、「自分にとって、日本とは何か。日本の風土とは何か。また、自分の生まれ育った場所というもの、また、その存在の根っこは何か。」、そういうような疑問を育ててきたのではないか。そういう風に考えてきますと、『狐』という作品で、荷風が生まれた家、幼年時代の体験を振り返ることに、かなり重い意味があつたのではないか、そんな風に考えるのです。

2 荷風の幼年時代と『狐』の時代設定

荷風が生まれたのは、明治十二年、小石川金富町という所です。この金富町というのは、今日では、町名が変わってしまいました。このお茶の水女子大学から、かなり近い所にあるのであります。地下鉄の茗荷谷の駅と後樂園の駅のちょうど中間の所を、ちょっと上上がったのが、金富町です。今は、荷風の家の跡というのは、まったく残っておりませんけれども。

荷風が金富町の家に通じたのは、そう長くないのです。というのは、この金富町の家から、母方の祖父の家が下谷にありましたので、そこで随分長い間、養育されてきました。

明治十九年に、金富町の家に戻ってまいりました。そして、小日向の黒田小学校に入学するわけです。

荷風が回想しているところによりますと、海軍服に半ズボンというハイカラな姿で、小学校へ行く。完全に山の手の、お坊ちゃんスタイルであります。

明治十九年といえますと、いわゆる「鹿鳴館時代」で、でき上ったばかりの鹿鳴館で、婦人達が、あの、パッソルスタイルという特有の裾の広がったスカートをはいて、マズルカやカドリールを、踊っているという、そういう時代でありました。

荷風のお父さんは、さっきもいいましたように、内務省の高級官吏でありまして、青年時代に、アメリカに留学したこともありまして、鹿鳴館時代の先端を行く、そういう人であり、西洋風の生活をとっていました。

荷風が、後年、書いた回想を読みますと、十畳の居間に、じゅうたんを敷いて、テーブルと椅子を備えつけ、そこを、一種の洋室にする。完全に洋館にするというのは、本当の上級階級でして、荷風のお父さんのような、中流の上ぐらいの暮しの人の場合には、洋風にするというのは、畳の上に、椅子とテーブルを置くということとです。そして、役所から帰ると、スモークングジャケットを着て、そして、大きなパイプをくゆらしている。そして、読書をする。荷風のお父さんの場合には、漢詩人として、かなり名のあった人でしたから、おそらく、読んでいたのは、洋書も読んでいたでしょうけれど、中国の漢詩が多かったのではないかと思えます。それから、お母さんは、本郷の屯岐殿坂にあった教会に通って、教会で、西洋料理を習っている。その習い覚えた西洋料理を、実際に作って一家に振舞う、そういうような生活だった。

ところが、この『狐』という作品を読みますと、こういう文明開化風の家生活というのはほとんど影をおとしていない。お読

みになった方は、ご存じかと思いますが、父親が、庭の一隅に見われた狐を退治する、その時に、洋服に着がえて、狐退治する。そのあたりに、文明開化の家庭の片鱗というのが伺われるくらいのものであります。

ところで、この『狐』の物語の年代は、だいたい、明治十一、十二年頃ということになっております。書き出しのところは、『もう、三十余年の昔、小日向水道町に――だいたい、これも、この辺の場所ですが――小日向水道町に、水道の水が、露草の間を、野川の如くに流れていた時分のことである。』

こうあります。

ところが、荷風が、実際に、小石川、金富町の家に帰ってまいりましたのは、明治十九年のこととして、その前は、まだ幼くて、自分の家の記憶というのはほとんどなかったはずです。つまり、金富町の家に帰ってきた小学校時代の記憶を、ざっと十年ばかり昔へ遡らせて書いている。それが『狐』という作品のフィクションの一つだろうと思うわけでありませう。

3 崖上の世界と崖下の世界

ところで、荷風が生まれました、金富町の家というのは、かなり広いわけですし、敷地が、四百何十坪、建坪が百坪ぐらいの家である。そして、この家は、崖の上に新築された住居と、それから、暗い木立ちが、うっそうと生い茂っている崖下の世界、こんな二つの世界に切り分けられるわけです。崖下の風景と

は、『杉の木が、冬でも夏でも、真黒に静かに立っている。』と、こう書かれています。それから、崖の下には、古井戸があって、そこには、へびだのむかでの、げじげじなどがいっぱい住んでいる。そして、井戸のそばには、中が、うつろになった柳の木がある。誰も彼もがこの古井戸のある崖下を無気味な場所と考えている。とりわけ『狐』の中の幼い子ども、『私』と書かれておりますけれど、これは、多分に、荷風の幼年時代に重なり合いますが、この幼い「私」は、崖下の世界というのを、大変恐がるわけです。こんな風にかかれていますが、

「夜は古井戸の其底から湧き出るのではないかと云うような心持が久しい後まで私の心を去らなかつた。」

こういう世界として、『狐』では、荷風の家が書かれているのですけれども、この崖下の、何か、おどろおどろしい世界のいわば、精霊というかアニマというのか、あるいは、スピリットといいますが、そういうものとして、狐が現れてくる話であるわけです。事件そのものは、こんな風に書かれています。季節は、『朝寒』といえますから、今頃（十二月六日）よりちょっと前になるかと思えますけれど、父親は、役所に出勤する前に、必ず、庭に下りて、柳の木のそばで、大弓の稽古をする。そのときに、崖下の茂みの中に、何か、狐らしいものの影を認めた、というわけです。それで、父親は、書生と、それから、抱えの人力車夫、――書生を抱え、人力車夫を抱えているのは、当時では、なかなかの豊かな家庭なんです――この二人に命じて狐の搜索をさせる。とこ

ろが結局、狐の姿は、みつからなかった。

ところが、翌年の正月になって、崖の上の家に、にわとり小屋がある。そのにわとり小屋のにわとりが、狐に、食い殺されてしまう。それで、その報復というわけで、大掛りな狐退治が行われる。今申しました書生―田崎というのですが―それから、人力車夫、それから、出入りの鳶職の頭、そういう人達を動員して、父親が指揮を執って狐退治をする。

その日は、一面に雪が降り積もっていたわけですが、小半日ぐらい搜索して、結局、狐退治が成功する。崖下の庭から、狐の死骸をぶら下げて、一同が意気揚揚と引きあげてくる、という、こういう場面になるわけです。

この狐退治というのは、狐の穴を、火薬を買ってきて、いぶしたてるとか、父親が、大弓を持って狙うとか、鳶の頭が、鳶口を持って狙うとか、実に、狐一匹を退治するには、大掛りなものになるわけですけれども、そこで、父親を総大将にした狐狩りの一行が、凱旋するところを、ちょっと読んでみます。

「大弓を掲げた肥満の父を真先に、田崎と喜助、―この田崎が書生で、喜助が人力車夫ですが―二人して、倒に獲物をつるした天秤棒をかつき、その後、清五郎と安が引き続き、積もった雪を踏みしだき、隊伍も正しく崖の上のたち現われたときには、私は、ふいと絵本で見る忠臣蔵の行列を思い出し、ああ勇ましいと感じた」

これはまさに、忠臣蔵の引き上げのイメージになっているわけ

です。しかし、真近く進んで、書生の田崎が、漢語混じりで、

「坊ちゃんこの通りです。天網恢恢疎にして漏らさずと、差し付ける狐を見ると、鳶口で打ち割られた頭蓋とくいしばった牙の間から、どろどろした生血が、雪にしたたる有様、私は覚えず母親の柔かい袖の陰に顔をおおい隠した。」

こんな風に書かれています。

ここで、「私」の、その殺された狐に対する、あるいは、狐狩りに関する心持ちというのは、二重になっている。それは、どういふことかという点、一つは、狐狩りの企てを、いかにも男らしく、勇ましいと考える、ところが、実際に血みどろになった狐の死骸を、つきつけられると、今度は、母親の柔い袖の陰に顔を隠してしまふ、こういうことだと思えます。

4 「私」の感情の二重性

この『狐』という作品を読む場合には、一方では、父親の勇ましさに魅かれ、一方では、母親の懐の中に、もぐり込んでいこうとする。そういう「私」の二重の感情というのから、考えていかなくなくてはならないだろうと思えます。

「狐」を読みますと、この「私」は、いつも、崖下の木立ちとか、底なしの井戸から、恐怖をそそり立てられている、そういう子どもである。そして、そういう「私」にとつての、避難所というの、例えば、母乳である。あるいは、母親である。

しかし、よく読んでみますと、そういう崖下の暗い世界、おど

ろおどろしい世界、そういうものを恐れている「私」というのは、実は、一番深い所で、そういう所に魅かれていているということであります。

それは、俗に「恐いもの見たさ」ということを言うけれども、それだけではないのではないか、『狐』の中に、こういう文章があります。

「恐いものは見たい。おそるおそる訊く私が知識の若芽を乳母はいろいろな迷信のはさみで切り摘んだ」

こういう「私」が、崖下の世界を、恐れるというのは、結局は、母親のやさしさというところに、一番の原因があると、こう考えた方がよろしいかと思えます。

「私」の場合、崖下の世界というのは、大人のお伴がなければ、自由に歩き廻ることができない、そういう禁忌の場所になっている。それから、古井戸のそばにある柳ですが、その柳に、いつも悪いことをすると、縛りつけるという風に、おどかされている。それから「私」は、いったんは父親と一緒に、狐退治をしようと思うのですが、母親から、風邪をひくから、という理由でさし止められてしまう。『狐』という作品を読んてみますと、「私」は、正月に、たこ上げをして遊ぶというような描写は、あるんですけども、普段は、家の中で、お母さんと一緒に、ままごとをしたり、絵草紙を広げたり、そういう子どもとして描かれている。あまり男の子らしいところは、ないわけです。こういう具合に、いつも母親や乳母の保護の許にある、そういう子どもであるから

こそ、今度は、その裏返しとして、崖下の世界というのが、いつまでも恐ろしい世界、うとましい世界としてイメージされてくるのだからと思えます。

こういう崖下の風景というのは、私が、夜みる夢の中にもあらわれる。

「古井戸ばかりかちょうどその傍らにある朽ちかけた柳の老木が、深い自然の約束となって、夢にまで私をおびえさせたことが幾度だかしれなかった。」

こんな風にかかれてきます。「深い自然の約束」という言葉を手がかりに考えてまいりますと、この崖下の世界というのは、ただ夢の中に出てきたイメージというだけではなく、やはり、幼い「私」の心の底に潜んでいた「何か」を現わしている。

5 「私」の内なる母と父の原型

この作品では、崖下の不気味さをいうのが、荷風らしい木目の細かい描写で、よく書かれているわけですけれども、この辺まで話してまいりますと、もう、お察しかと思いますけれども、この崖下の世界というのは、「私」の心の底に、わだかまっていた。いわば、「母なるものの原型」としてうけとめることもできる。あるいは、ユングが言っております。グレートマザー、そういうような概念をここから引き出すこともできるだろうと思えます。ご存じのように、グレートマザーというのが、善と悪と二つの顔を持っている。河合隼雄さんが、『昔話の深層』の中でこう言わ

れている。

「母性は、その根源において、死と生の両面を持っている。

つまり、生み育てる肯定的な面と、すべてを飲み込んで死に到らしめる否定的な面を持つものである。人間の母親も、内的には、このような傾向を持つものである。肯定的な面は、すぐ了解できるが、否定的な面は、子どもを抱き締める力が強すぎるあまり、子どもの自律を妨げ、結局は、子どもを精神的な死に追いやっていく状態として認められる。両者に共通な機能として、包含するということが、考えられるが、これが生につながるときと死につながるときと、両面を持つのである。」

明治の子ども一般を考えますと、男の子はもっと元気に遊んでいたはずだし、それから僕なんかの子ども頃を考えますと、こういう崖下の暗がり、すみっこ、穴ほことか、そういうのは、遊びの場所として、実におもしろかった。奥野健男さんの『文学における原風景』には、そういう原っぱやすみっこは、縄文的な世界のなごりで、そういうところで子ども達は、縄文人と同じように、いろんな採集をするのだと説明されています。

荷風の『狐』の場合には、そういう縄文の世界というより、ただ、むやみに恐しい世界、恐い世界として現れる。それは、結局、「私」を束縛している。母親のやさしさを裏返したときに、崖下の世界は、大変おぞましい無気味な世界として現れてくるわけです。勿論、『狐』の中の「私」は、母親のやさしさというものが、自分の男の子らしき、活発さを、窒息させているということに

は、気づかないけれども、そういう母親の世界から独立していろいろという願いを、もう持ち始めている。そんな風に読めるんだらうと思います。

そこで、父親という存在が、意味を持ってくるわけですけれど、父親は、崖下の世界を象徴する狐を退治する。これは、言ってみれば、本当は、この『狐』の中に登場する、「私」が退治しなければいけない。ヨーロッパの神話を見ますと、少年英雄が、怪物を退治するという普遍的なプロットがあるんですけれども、実際に、私は、この狐狩りに参加しない。というより、参加しようとするんだが、母親から「風邪をひくから」と、止められて、参加しない。つまり父親が、「私」の代わりに狐を退治してくれる、こういうことになるわけです。

この『狐』を読んでみますと、父親が、一種の大げさに言えば、文化英雄みたいに書かれている。つまり、崖下の世界というのは、非常におどろおどろしい、秩序のない混沌とした世界なのですけれども、そういうものに、ある一定の秩序というものを創り出す—これが、父親の役割である。こういう父親の姿というのは、『狐』の初めの方ですでに書かれているわけです。父親が役所に出かけの前に古井戸のそばの柳の所で、大弓の稽古をする。それが、「私」には、非常に不思議であった。

「父には、どうして風に吠え、雨に泣き、夜を包む老樹の姿が、恐くないのであろう」 こういう風に書かれている。

そして、崖下の、おどろおどろしい世界の中心である古井戸

で、父親は、大弓の稽古をする。——これは、平安時代に、鳴弦と申しまして、弓の弦を鳴らして、悪魔払いをするという儀式がありましたけれど、それを連想させる。それから、古井戸の周りには、腐ったきのこだとか、ぬるぬるした白い腹を見せて、うごめいている虫とかいっぱいいる。泥棒がきたない手拭いを置き忘れていくのも、この井戸のそばである。こういったいろいろの不吉なしるしを、一身に背負ったいけにえとして、狐というものが登場する。ですから、狐を退治するということは、同時に、今申し上げてきた崖下の混沌とした世界というものに、秩序を与える、そういう象徴的なドラマということになるわけです。先ほども申しましたが、狐を退治する、そのときに、父親が大弓を持つ、あるいは、鉄砲が動員される、鳶口、天秤棒で、皆が武装する。それから、火薬店へ行って、火薬を買ってきて、煙硝を燃やすという、実に大掛りなことをする。そんな大掛りなことまでしなくてもいいんですが、それは、今申しました、象徴的な劇としての意味合いというものを、この狐狩りが持っていたからだろうと思います。

しかも、この日は、一面に雪が降って、銀世界になって、その所に「生けにえ」としての狐の血が流れるわけですけれども、その血と雪の色合いのコントラストというのが、ますます、狐狩りの象徴劇の意味合いを強めることになるだろうと思われれます。さて、こうやって狐が退治された。そうすると、今度は、狐狩りに参加した男達は、お祝いの酒盛りをする。そのときに、今度

は、にわとり小屋で飼っておりましたにわとりを、二わつぶして、それを肴に宴会をする。「私」は、もう早くに床に着いておりますけれども、そういう大人達の宴会というものを、何か、割り切れない思いで、この騒ぎを聞いている。

それが、物語の最後になっておりますけれども、こんな風に書かれております。

「あわれ、二羽が二羽共同し一声の悲鳴と共に、田崎の手に首をねじられ、喜助の手に羽根をむしられ、安の手に腹をさかれ腸を引き出されてしまった。夜ふけまで舌なめずりしながら酒を飲んでいる人達の真赤な顔が私には絵草紙で見る鬼の通りに見えた。眠りながらその夜私は思った。あの人たちはどうしてあんなに狐を憎んだのであろう。にわとりを殺したからとて、狐を殺した人々は、それがためにさらにまた、にわとりを二羽まで殺した。」

こういうなぞが、「私」には解けないわけです。つまり、このところで殺された「狐」と、「私」の心の底にあった「母なるもの」とが、ひとつに重なり合っている。私はその母に魅かれています。つづけているわけですね。いったんは、父親の行動を勇ましく思い、喝采を送ったのですけれども、やはり、そこで殺された狐というものに、ある思いを抱き続けている。そして、また、酒盛りのために、にわとりが二羽殺されてしまった、という不条理というものを考え続けている。というところで、物語は終わる。

6 狐のもつイメージ

ここで、「狐」のイメージなんですけれども、これは歌舞伎に出てまいります、信太妻の伝説しのだと云うのがあるわけです。これは、平安時代の陰陽師として、呪力を發揮した人として知られている阿部清明という人がいます。この阿部清明が幼いとき、狐に育てられたという伝説があるわけです。芝居では、この阿部清明が、自分を育ててくれた母としての狐を、恋慕うという母恋いの物語になっている。この中に「恋しくば 尋ね来てみよ 尾張なる信太の森のうらみ葛の葉」という歌が出てまいります。ちょうど、これは、謡曲「隅田川」が、母親が子どもを思うという物語だとすると、それとは逆に、子どもが、生みの親を思う、母恋いの物語として信太妻の話というのがある。

荷風が、『狐』を書いたときに、文章の中には出てまいりませんけれども、この信太妻の伝説というのを思い浮かべていただろうと思われます。

ところが、この『狐』の話では、そういう狐―母のイメージと重なり合う狐―が、無残に殺されてしまう、そういう伝説を罵口で、一撃の下もとに、打ち殺してしまふ。そういう根を絶ってしまふというのが、近代の世界ということになります。

こう考えてまいりますと、この『狐』という作品は、やはり、江戸から明治へという大きな時代の、その流れの中に浮かべても一度考え直してみる必要があるのではないか、そんな風に思う

わけです。

(二) 歴史的・文化的に考える―江戸から明治へ―

1 二枚の地図を見て

ここで、二番目のモチーフに入っていくわけですが、その前に、ちょっと、荷風の生まれた生家の近辺を、江戸切り絵図と明治の地図で、ちょっと見ていただきたい。

これは、江戸の切り絵図、嘉永年間に出来た切り絵図ですが、「東都小石川絵図」と、こうなっております。(図版①)この南側を江戸川が流れているわけですね。江戸川公園の所から、上水道が、こう分かれているわけですし、これが後樂園を通過して水道橋で神田川を渡って、下町一帯に給水する、とこういうことです。

地下鉄が、今は、このあたりを、こう走っています。若荷谷と後樂園の駅のあいだに金剛寺坂という坂がある。これが、安藤坂という坂で、この安藤坂を下ったあたりが、後樂園です。この周りは、武家屋敷―武家屋敷といっても大名じゃなくて、旗本とか御家人の屋敷―がずっとあった。この武家屋敷の真中に、小石川富坂新町という町屋があります。それから、ここに、金杉水道町という、これも町屋がある。これを、武家屋敷の中に、こういう町人の住んでいる一角がある。金富町というのは、金杉水道の金と富坂町の富を採って金富町と名付けた。いかにも明治らし

図版① 「東都小石川絵図」(嘉永年間)より

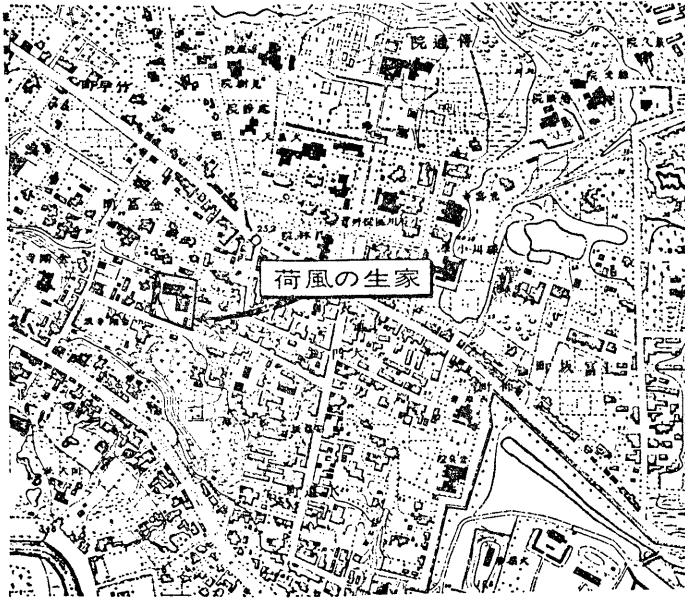


い名前の付け方で大田区なんかと同じ何の由来もない付け方なんです。

荷風の家は、どこにあったかと申しますと、太田平右衛門、遠山彦三郎、後藤勝次郎、この三軒の家がある。これを三軒そっくり買い取り、それを一つの敷地にならして新築したわけです。明治の初めには、旗本屋敷、あるいは大名家敷を明治政府の官庁や、官員の屋敷にすることは、よくあったことで、内務省の高級官吏だった荷風のお父さんも、同じひそみに習ったわけです。こういう切り絵図にあったような、御家人の屋敷が官員の屋敷になっていく―これが、江戸から東京という都市のかわり目を示しているということになります。

これが伝通院、今よりよっぽど境内が広い、この通りを春日町から上がってくると、その先が、お茶の水女子大学になる、こんな見当です。

この一角が(図版②参照)これが、お茶大の前の通りで、これが、春日町の方への通りで、これが、神田川。この地図は、明治十九年に作られた五千分の一の東京図というのですが精密な地図ですがこの点線は、水道が暗渠になって、地下を走っているという意味です。今の後楽園の遊園地、後楽園球場等は、だいたい、この周りと考えていただきます。先程の金剛寺坂という曲がった坂のあたり、荷風の家というのは、この所です。この地図には二メートル間隔毎に等高線がある、そうすると、ここに等高線が通っているのが見える。そうすると、先程から申してきました、崖



下の世界というのが、ちょうど、この所にあたるわけです。そして、崖上にこういう具合に家が建っているというのがおわかりだろうと思います。ちょうど、ここに、崖というか、山の手の斜面がある。それが二段になっている。その斜面にそって広がっていたのが、荷風の家の敷地なのです。そして、先程いきました、小石川金富町といえますのはこの所です。

この図では、あまりよくわかりませんが、この近辺は、あまり家が建てこんでいません。一面に桑畑が広がっていたそんな眺めというのがわかると思います。

この家の由来については、『狐』にも、こう書かれていますので。

「旧幕の御家人や旗本の空家敷がここに売り物となっていたのをば、その頃私の父は三軒程をひとまとめに買い占め古びた庭園や木立ちをそのままに広い邸宅を新築した。」

今、スライドで御覧いただいたので、おわかりかと思えます。

後藤勝次郎、太田平右衛門、遠山彦三郎、こういう御家人旗本の屋敷を三軒買い占めた、こういうことだと思えます。

2 山の手の荒廃と文明開化

先程説明しましたように、荷風の家の上手には、一面に、畑が広がっております。あるいは、茶畑、桑畑が広がっている。その間に、生け垣で囲まれた宅地が、散在している、こんなところです。台地の上には、伝通院の木立ちがあるという、こんな眺めに

なっていた。こういう眺めというのは、どういふ意味合いがあるかということを考えてみるわけですが、江戸という町は、一つには、水の都―墨田川を中心とする水の都である。それから、山の手の方は、武家屋敷で、たぐさんの木立ちがあつて、森の都であつた。

幕末に日本に來た外人は、江戸という町が、世界でももっとも美しい都市の一つであるということをおぼえております。ちょうど、十九世紀のこの頃といふと、ヨーロッパのどこの都市も、いわゆる産業革命の煤煙が一面立ちこめていたといふ、そういう都市になっておりましたから、ヨーロッパ人から見ると、江戸というのは、確かに、美しい町であつたにちがいない。だいたいが、みんな、炭火で暖をとつてゐるわけですから、煤煙といふのが、まったくない。空が大変に澄んでゐた。

ところが、明治維新がまいりまして、そこで、幕府が解体する。山の手を占領してゐた諸大名といふのも、国許へ帰つてしまふ。旗本、御家人も、これもまったく屋敷を明け渡さなければならなくなる。明治の初め頃の山の手といふのは、実に荒涼とした場所になつてしまふ。日本の庭園といふのは、ヨーロッパと違つて、ちょっと手入れを怠ると、たちまちぼうぼうのやぶになつてしまふ。せつかくの山の手のすばらしい庭園といふのが、本當に、八重葎やむらぎの生い茂る、木立ちの、うっそうと生い茂る、何か、荒涼とした風景を呈するようになる。先程の地図にも出ていたのですけれども、明治政府では、山の手を、このように空き地にし

ておくのもつたいたないということ、桑の木と茶の木を植える。なぜ、桑と茶を植えたかといふと、この頃の日本の、輸出品の一番重要な品目が、絹であり茶であつた。そういうところからきてゐる一種の殖産興業政策といふわけだ。

もう一つ付け加えておくと、薩摩と長州の出身者が、天下を取るわけですが、薩摩にしても、長州にしても、もともと江戸のような都市といふのはない。萩にしても、山口にしても、鹿児島にしても、小都市とはいへないけれども、中都市である。そういうところに、生い育つた人たちですから、江戸といふ非常に大きな都市を改造していくといふビジョンというものを持ち合わせる事ができなかった。萩にまいりますと今でも、土族屋敷が残つてゐます。行かれた方は御存じかと思ひますが、築地の塀がありまして、屋敷内に、みかんが季節にはたわわにみものつてゐる。つまり、ああいう城下町では、屋敷の中を畑にして、例えば、みかんを植えたりすることが、ごく普通のならわしだつた。そういう発想を、明治維新になつて、今度は、江戸へ持ち込んで、桑や茶を植えたといふことだらうと思ふわけです。そして、一面に桑畑や、茶畑が広がつてゐた、その間にもう住む者のいなくなつた武家屋敷が、荒廢して広がつてゐる。これが、だいたい明治十年代くらいまでの山の手の景觀だつた。

そういう山の手のすたれた景色といふのは夏目漱石の『硝子戸の中』に回想されてあります。漱石が生まれたのは、早稲田のそばなんですけれども、桑畑が広がつてゐたとか、あるいは、うっ

そうとした木立ちがあつて恐かつた、などということが、『硝子戸の中』に回想されています。漱石の場合には、みなさんも存じの「現代日本の開化」等で、日本の文明開化にいろいろ批判を突き付けておられますけれども、その原体験を探ってみると、やはり、漱石が、そういう荒唐しかけた江戸の一隅で育つたということが、かなり大きな意味を持っているのではないかと思います。それから、詩人の蒲原有明に、こういう回想があるんですけれども、ちょっと読んでみますが、

「明治二十年前の東京は、江戸末期の情緒が頽れながらも、残つてはいたが、維新の際に受けた打撃が、そのままになつていて、一方、文明開化の施設の進展と反映して、到る所に、すさんだ色が著しく目についた、山の手は、ことにそうであつた。旗本かなんぞの広々とした屋敷跡には、桑畑が新たに拓かれていた。実際、その頃の山の手は、草深の田舎であつたといつてよい。下町の女子どもは、狐が出るといつて、泊まりにもこなかつた。」

3 象徴としての「狐」と「にわとり」

『狐』という作品の背景には、こういう荒唐した山の手というものがあつた。江戸的世界の残骸が、荷風の生まれた家にも残つていた、そんな風に考えます。つまり、先程、『狐』の「私」の家というのは、崖上の世界と、崖下の世界の二つに、切り分けられると申しましたけれども、崖上の世界の方は、まさに、文明開

化の世界、崖下の世界の方は、いわば、江戸的な世界ということになるわけです。そして、その江戸的な世界を象徴する精霊として登場するのが、キツネというわけです。

狐というのは、様々な伝承とか、迷信に包まれているのですけれども、この荷風の『狐』の中でも、一家の女性は、狐にまつわる様々な伝承というものを信じている。ところが、男の方は、それを振り捨てようとしている、ということが、はっきりと書き分けられている。

「日頃田崎と仲の良いくない、御飯焚きのお悦は、田舎出の迷信家で、顔の色まで変えて、お狐様を殺すのは、お家のため不吉であることを説いた。すると田崎は、主命の尊き、御飯焚き風情の嘴を入れるところでない、一言の下に排斥してしまつた。お悦は、真赤なほほをふくらまし、乳母も共々私に向かつて、狐つきや狐のたたり、また狐の人をばかすこと、伝通院裏の沢蔵稲荷の靈験なぞ、こまごまと話して聞かせた。私は、その頃よく人の言うこつくり様の占いなぞ思い合わせ、半は田崎の勇に組して、一緒に狐退治に行きたいようにも思い、半は世にそういう不思議もあるのかしらと疑いもしたのであつた。」

そんな風書いてあります。

この狐というのは、江戸時代には、どういうイメージをもつていたのか、これは、稲荷信仰と結びつくわけですけれども、山の手の下級武士の家では立身出世を祈願するためにキツネを屋敷の中にまつる。そういう屋敷神がたくさん作られていた。それが

ら、江戸時代には、よく女性が狐つきになるわけですが、その狐つきが落ちるとそのお札に狐を祭る、そんな稲荷もたくさん作られていた。江戸という町の特徴としてよく言われるんですけども、「伊勢屋、稲荷、犬の糞」というコトワザがある。伊勢屋というのは、伊勢出身の商人が非常に多かったということ。それから露路裏などで、犬がたくさん飼われていた。それから、稲荷がどこでもあったということなんです。

けれども、そういう場合に、お稲荷というのは、小地域の中心として、ある意味をになう聖地であった。ところが、そういうお稲荷の立っている意味、あるいは、狐の持っている意味というのが文明開化の時代になって、だんだんとうすめられていく。そういう時期が、荷風の『狐』の物語の背景にあったらうと思われまます。それから、山の手と下町の境にたくさん稲荷があったというところが、言われています。境というのは、いろいろありますが、いい場所という風に考えられるのですが、例えば、橋であるとか、坂であるとか、十字路であるとか、そういう所に道祖神とか庚申塚とか、あるいは、お地藏様が置かれる。これは、普通、サエの神——境界を表わす神という風に言われておりますが——お稲荷もそういう意味合いがあった。

荷風の家の場合も考えてみますと、先程、地図でご覧になったように、山の手と下町の境界面にあるということ、そういう所に、狐が現れる、そんな風に読み取ったらいいのではないかと思えます。

ところが、狐の持っていた霊力・呪力というのは、文明開化の世界では、色あせてくる。一方では先程申しましたように、『狐』の「私」の家では、にわとりが飼われているというわけです。にわとりというのは、卵を生み、肉を食べる大変有益な家畜である。文明開化の世界の動物なんです。ところが、狐というのは、怪しげな伝承がまといついている。何の役にも立たない実にあいまいな動物で、これが江戸の世界を代表して現われている、こういうことだろうと思います。

『狐』の中の私の家というのは、崖上の家、それから崖下のおどろおどろしい世界。崖上で飼われているにわとり、それから崖下の世界に現れる狐、そういう風に、文明開化の空間と江戸的空間というのが、実にきちんと切り分けられている、こういうことであるわけです。

それで、にわとりを飼うというのは、江戸時代からあったのですけれども、本格的な養鶏というのが始まったのは、近代に入ってから、明治十年代になりました、レグホンだとか、コーチンだとか、僕等が知っておりますにわたりの西洋品種が輸入されました、そして舶来のにわたりの飼育というのが盛んになってまいります。こういう風に考えてまいりますと、『狐』の「私」の家で飼われていたにわとりというのは、この頃、明治政府が推進していた殖産興業政策のミニチュアになっている。こう考えてもいいんだろうと思うのです。

そして、また、荷風のお父さん、永井久一郎という人ですけれど

ども、この人は、内務省衛生局に勤めていた。内務省というのは、大久保利通が作った官庁であるわけですから、でも殖産興業政策を一番重点的に推進したのが、内務省である。内務省衛生局の高級官僚であった荷風のお父さんは、この頃、チェンバーの百科全書というのを翻訳しているわけなんです。この百科全書は文部省の蔵版ですが、その中で、荷風のお父さんが訳したのは、「豚・兎・食用鳥・籠鳥編」というものです。

4 荷風と文明開化

初めの方で、狐狩りというのは、崖下の世界にわだかまっていた。いわば、母なるものの原像を殺りくする祝祭劇だと申しました。しかし、もう一つ歴史的な文脈というものも被せてみると、『狐』という世界は、文明開化の実利的な世界、あるいは、合理的な世界というものが、江戸的な世界の中に、蓄えられていたおどろおどろしい、伝承というものを、いわば、抹殺してしまう、そういうドラマである、こんな風に考えていた。そして、また「私」の父親に与えられていた役割というのは、混沌とした崖下の世界に秩序をもたらし、もっと了解し易い世界に変えることだった。その一方、幼い「私」というのは、母親の柔い袖の陰に隠れる、そして、父親の振舞に、ある憎しみを持ち続けるわけですけれども、荷風という人物は、文明開化的な世界、その男性的な世界というものを嫌ひまして、それとは別な、江戸的な世界に帰っていきこうとした人だった。そこに女性的なるものを

求めようとした人だった。そういう荷風というものの原像が、この『狐』という作品に、はつきり現れているのではないか、そういう奥行きを持った作品として、『狐』という作品を読んでみたいと思います。

||了||

(立教大学)

[記録・仲 明子]

(引用の文章は新漢字・現代かなづかいにしました。)

